客船よもやまばなし

＜連載⑥⓪＞

小樽のディナークルーズ

大阪府立大学船舶工学科助教授
池　田　良　穂

前回は、 今年夏に北海道岩内から直江津まで東日本フェリーの「はあきゅり」で航海したことをご紹介したが、この11月に再び北海道に行く機会に恵まれた。

筆者が、現在、本業のひとつにしているのが海洋工学。造船不況の始った頃から、船舶工学だけでなく、より広く海洋に関するあらゆる技術を研究対象とするようになり、船好きの筆者も船の研究だけでなく海洋開発関係の研究も行なうようになった。余談になるが、こうした成果が実って、筆者の勤務する大阪府立大学の学科名も来年４月から、船舶工学科から海洋システム工学科と名前を変える。その海洋工学関係の研究会が小樽に出来た小樽港マリーナを会場として開かれたのである。

小樽には、 学生時代から何度も行っているが、いくたびに大きく変貌しているのに驚かされる。今回も小樽市内で見掛ける観光バスの台数の多いのに驚かされた。札幌で乗ったタクシーの運転手が、最近は観光客を小樽に取られて、と嘆いていたのがよく判る。小樽の運河の周辺、北市ガラスの工場、そして裕次郎記念館は観光客で溢れている。また、寿司屋が軒を並べる寿司屋横町もすっかり観光地化され、観光バスで観光客がどっと押掛けるまでになっているとのこと。時代が変ったというべきか、小樽が時代を呼寄せたというべきか、よくはわからないが、とにかく観光の町「小樽」となったことは確かのようだ。

この小樽の町外れの、木材用の港湾施設に第３セクター方式を導入して、小樽港マリーナが造られ、一昨年に仮オープンした。その後整備が進められ、ボート、ヨット用の立派な桟橋、陸上施設が完成し、今では大型のボート、ヨットが所狭しと並べられている。説明によると、ほぼ満配の状態で、オーナーのほとんどは札幌在住の人とか。マリンレジャー・ブームもついに北の端にまで延びたとも言える。

この会議の 懇親会としてディナークルーズが企画されていた。いつもの懇親会に比べるとやや高い7,000円の会費であったが、船ファンの筆者としては乗らないわけにはいかない。船はヤマハで建造されたＦＲＰ製の双胴船で、小型船舶検査機構の検査証がブリッジ横に貼られていたから、垂線間長は12m未満のはず。旅客定員は32名で、船名はクリスタル・オブ・ザ・シー。運航は小樽ベイクルーズ（小樽観光振興公社）で、この

小樽港マリーナ

右が小樽港マリーナのメインハウス・左が裕次郎記念館

他にも遊覧船や屋形船の営業も行なっている。クルーザー・タイプのクリスタル・オブ・ザ・シーは、いつもは予約制でランチクルーズやディナー・クルーズなどを行なっているようだが、今回はこの会議の出席者によるチャーター。マリーナの桟橋では船長が出迎えてくれ、いよいよ船内に入る。1階は30名程度が座れるレストランになっており、上部にオブザベーションデッキがあるがこちらは吹きっさらし。11月の北海道ではちょっと寒くて使えない。

食事は蟹づくし。ゆで上げた毛蟹とずわい蟹が大きな皿の上に、いかにも北海道らしく、ダイナミックに盛られている。アルコール類は飲み放題とのこと。食事は、このゆで蟹と、蟹のサラダの2品だけで、参加者からは一寸不平も出たが、定員30名程度の小さな船での営業だから、食事の質をあげることは経営的になかなか厳しいのであろう。1隻高級ボートを借切って楽しんでいることを考えるとむしろ安いとも思えるのだが、一般の人々には受け入れられないのかもしれない。後でパンフレットをみたところ、15,000円ほど出せばフルコースのディナーも出している。やや値切りすぎた感がなくもない。

船はマリーナを出て、小樽港の周辺をゆっくりと回遊。しんしんと冷え込む中での、小樽の夜景もなかなか美しい。幸い海も11月にしては穏やかで船酔い者も出ない。約2時間食事とお酒を楽しんだ後、小樽運河にほど近い第3埠頭に着岸して下船、小樽でのディナー・クルーズを終えた。船内での食事で満足できなかった一部の参加者は、夜の小樽の町に、北の美味と熱潤を求めて散っていった。

小樽港のディナー・クルーズ船
「クリスタル・オブ・ザ・シー」